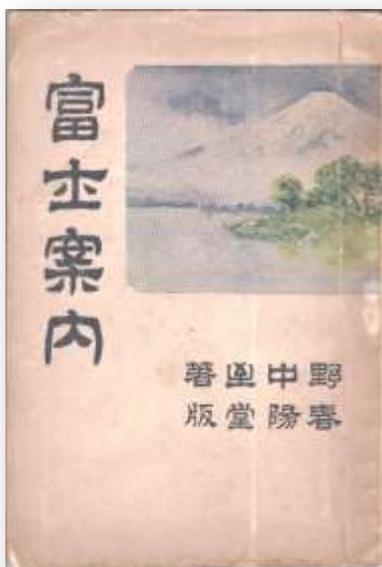


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第15号

(2013年7月)



北光クラブ
自然観察クラブ

野中 至編『富士案内』(明治34年8月4日・春陽堂発行)

富士山の位置

我が敷島のやまと男子女子は言うも更なり諸越人や高麗人さては眼彩毛色の変れる西洋人に至るまで苟くも日本の名を知れるものは富士山なる固有名詞を知らざるもの鮮し。是れ併しながら其山が日本第一の高山なるが為めのみならず、其位置は日本本州の中部に峙ち其姿勢は端麗にして美人の新に浴を出でたらんが如く、蒼海を前に控え大川を左右に帯び八湖は其麓を繞り八岳は其頂に聳え、其余脈は施いて縦横に奔りて四方の連山となり、此山惟り巍然として衆岳の宗となる。其形勢の雄偉なる其容姿の秀逸なる加うるに周囲の点綴其美を補うて寸分の遺憾なからしむるあり、之を名山の標本として四海八表に持ち出せばと何ぞ遜色あるべけんや、況んや朝靄暮霞の変。光彩陸離として得も言われぬ景色を呈し天籟地籟飄々颯々として鈞天之音楽を奏するあり。されば古來歌に詩に画に將た連歌に俳諧に謡曲に端歌都々逸の俗謡に至るまで之を詠じこれを謡いたるもの枚挙に遑あらずして、凡そ日本の美的理想は殆んど此山に於て代表せられたるの感なきにあらざるものも亦た決して偶然にあらず。

抑々此山は駿河甲斐及び遠江の三国に跨り海拔3,785米突(即ち34町39間にして12,490尺余)、北緯35度22分東経138度44分に位せり。此山は円錐形の熄火山にして全山熔岩より成り、而して其3分1強は確たる禿山にして復た土壤を存せず、随って草木の発生稀疎にして其7、8合以上は全然其根を断つ、山巔は広潤にして其面積約10万余方坪ありと称す、中央に竊然たる1大坎穴あり、是れ則ち旧噴火口なり、其周圍15、6町深さ10余間、四壁削立僅かに1道の坎底に降るべきあり、所謂ハルオの芙蓉なるものは此の坎穴の周圍に凸起したる丘岳は是れなり。

この度ユネスコの「世界文化遺産」に認定され、改めて注目されている富士山ですが、長らく信仰登山の対象として人々に愛されてきたこの山に、高層気象観測という科学研究の立場から、通年観測への試みとして初めて山頂越年を計画・実行しようとした人が、100年前の明治時代にいました。野中至(到)がその人です。

千代子夫人の協力を得ながらの越年は病気のため中途撤退となりましたが、その顛末は時代の人々の感動を呼び、早くから演劇の題材に取り上げられた他、幾たびも文芸作品化され、映画になり、新田次郎の小説『芙蓉の人』やそのTVドラマ化で親しまれた方も多いと思います。

その著作『富士案内』は、上記の挑戦の数年後に発行された本で、冒頭に引用した「富士山の位置」から書き起こされ、各コースの案内（途上の名所案内も含む）から実際の登頂に当たっての時間配分、携行品、費用、服装などの注意点、はたまたお土産品の紹介まで、冒頭 33 ページにわたって実に懇切丁寧な登山ガイドブックになっています。

登山ガイドとしての一部をさらにご紹介します。

げざんつけたりとざんどう なんい 下山 附 登山道の難易

登山道は各口多少の難易あれども、登山者の目的と住所の關係とに依り一概に何れとも定めがたし、今其の長短を挙げて登山者の自ら択ぶに任せん、尤も里程のごときは各口大差なしと知るべし

一 大宮口は東京に便なるものの第2に位す、而して昇降共に困難なることは蓋し第1ならん、然れども此より登るものは大宮の本社に参拝するの便あり、又此より下山すれば鈴川より沼津又は興津等東西に出遊するを得べし

一 中畑口は東京に便なること第1なり、且つ昇降共に比較的容易なり、賃金1円余を投ずれば御殿場より乗馬にて2合又は2合五勺に至り、又10円内外を投ずれば剛力10数名にて御殿場より頂上まで乗詰にて籠を通ずるを得、籠詰の登山者は毎年2、3人は必ずあり、特に此道に於ける下山の『走り』極めて安全にして愉快なる等是等は蓋し此道の特有ならん、即ち7合目より路を右に取り永永山の半腹を奔下して直ちに3合目に達す、此間殆んど30分にて足れり、壮快譬えんかたなし是れを走りと称す、斯くて、太郎坊中畑を経て御殿場より西すれば佐野の滝、沼津地方、東すれば大磯、鎌倉、又乙女峠を踰れば函根に至るを得

一 須走口は東京に便なること中畑口と殆んど伯仲の間に在りとも雖ども、道少く迂遠を免れず、且つ昇降共に中畑口の次に位す、中畑の森林殆んど無きに反して此道は茂林甚だ長きが故に暑を避くるの便あるが如しと雖も若し雨後風死したるときなどは蒸し暑きこと堪うべからず、唯此地の便利は須走に旅宿甚だ多き事是なり、此道よ

り下山すれば御殿場に至るの外に道なし、此道も亦7合目より砂地を奔下する『走り』あり、然れども中畑の走りの安全なるに如かず
 一 吉田口は東京に最も不便なる道にして其昇降は大宮口の次なり、此道は途中の石室と吉田に旅宿の多きことを以て特色とすべし、此道にも『走り』あれども到底中畑のに比すべくもあらず、然れども此れを下りて甲府に入り、進んで鵜沢より富士川の急湍を奔下して岩淵停車場に至れば、鉄路東西に通ずるが故に興多くて便利なるべし

富士登山駅伝の圧巻「大砂走り」が、100年前の登山者にも楽しまれていたとは驚きです。

初版本にはこのガイドに先立つ巻頭に、幾枚かの折込地図、風景写真や、風景・登山風俗を描いた口絵などが30葉以上（著者自筆も含む）、富士を詠った古今の和歌俳句漢詩なども添えられ、目で見ても楽しめる内容となっています。

ところがこのような一般向けガイドの後に続く記事は、先に触れた「山頂気象観測所」に関する記述一色となり、富士山頂という高所に通年気象観測の拠点を置くことの意義を説き、そのために試みた度々の冬季登頂の記録や「富士観象台」への理解と協力の呼びかけには、筆者の富士山頂冬季気象観測への強い情熱が生々しく綴られているのです。

5ページに「目次」を掲載しました。初版本の構成（ページ数も）からその雰囲気を感じ取ってみてください。

野中至の富士山頂通年気象観測は、私設観測所から中央気象台、測候所へと引き継がれ、気象観測衛星にその役目が取って代わられ無人化する2004年まで、山頂で有人観測が継続されました。「官によらない一民間人の私的な行動が専門家の領域を動かした」「明治の精神の産物」の例としては他に、植物学の牧野富太郎、千島の郡司成忠、南極の白瀬矗、チベットの河口慧海などが挙げられます。

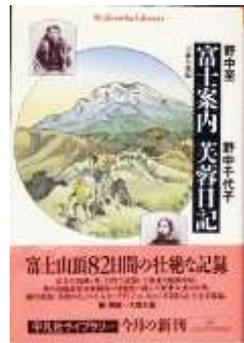
最後に、日本の近代登山に厳冬期登山の概念を提示したという意味で画期的な一文「寒中登岳を勧む」をご紹介します。

かんちゅうとうがく すす
寒中登岳を勧む

借予は茲に大に冀望を有せることあり、他なし今後有志者の寒中陸続登山あらんこと是なり、暑中の登山者は近年遽に増加し、古来言い伝ふる如き、『富士の山』な

る観念は何時しか消失し、殆んど自家庭先の築山に登るが如き調子となりは予の
 大に喜ぶ所なり、就ては今後は猶お進んで寒中の登山も、亦斯の如き調子となるに
 至らんこと冀望に堪えず、然るに暑中に在りては、老幼婦女の身すら毫も別条なく登
 り得るにも拘わらず、有為活潑の士が頂上に着するや、見るべきものも探求せずして下
 山を急ぎ、而して山頂に於ける諸般の現象を見尽したりと、云わぬ計りに誇り顔するな
 どは、実に遺憾の次第なり、予は観測所の為に一人と雖も登山者の多きを喜ぶと共
 に、斯の如きは其実一層心外の至りに堪えざるなり、古来単に高潔優艶なる美観と
 してのみ、宇内に名高き富士も、其怒るに当りてや恰も夜叉の荒るるに異ならず、真
 に意気峻厲にして犯すべからざるものあることも、亦大に人の知るに至らんことを望
 む、尤も目下未だ都人士に適する程の休泊所なきが故ならんとは云え、せめて2、3
 日位は逗留して学術上に於ける有益なる諸般の現象の攻究は、暫く措き山上に於
 ける種々雑多の偉観を窮めて下山せば富士も定めし本意
 とする所なるべし、左は云え暑中山頂の皮相の光景は、粗
 ぼ人の知る所となりたれば、願わくば自今暑中に於けるが如
 く、寒中の富士にもお近付きとなりて、其登山の記事を公
 にし、以て山頂の光景を世に紹介せられんことに予不肖な
 がら富士に代りて冀望に堪えず。(以下略)

参考文献：大森久雄編『富士案内・芙蓉日記』（平凡社）→



『富士案内』（初版本）目次

富士案内(富士登山案内)……………1
 富士山の位置／各登口／大宮口(表口ま
 たは村山口)／須山口(又南口)／中畑口
 (東表口又新道)／須走口(又東口)／北
 口(又吉田口)／登山期節／登降時間／
 登山準備附山頂の気候／登山費用(各
 登口と絶頂間)／頂上の案内／御中道／
 下山附登山道の難易／注意／名産
 富士観象会趣旨……………33
 富士観象台建設に付微意を述ぶ…………37
 富士山頂気象観測所設立の顛末…………47

第一回冬期登山記……………53
 第二回冬期登山記……………61
 建築準備登山記／剣ヶ峰観測所の経営
 寒中滞岳記(10月1日より12月21日に至る
 82日間)……………84
 寒中82日間の観測記……………101
 気象概況／気温の変化／食料及び飲料
 水／燃料及び灯油／被服／衛生
 夏期40日間の気象概況(8月12日より
 9月20日に至る)(吉田清次郎筆)…………135
 富士詣(大橋乙羽筆)……………139
 寒中登岳を勧む……………150

都会の森の自然観察会
～明治神宮に武蔵野の面影を求めて～
6月9日（日） 天気・はれ

自然観察クラブで今年3回目の東京行は、山ではなく街、しかも都心に近い繁華街のすぐそばです。

若者の街・原宿から巨大な木の鳥居をくぐって1歩参道に踏み込めば、そこは、街のざわめきや隣接する山手線原宿駅の電車の発着音、また北側では高速道路の音など文明の「賑わい」を鬱蒼たる木立越しに聞きながらも、一種の静寂と涼やかさの感じられる異空間です。国際色豊かな参拝者が踏みしめながら往来する玉砂利の参道の左右には広葉樹の森が高くそびえ、この都会のど真ん中に残された自然のオアシスが、100年も前の林学・農学・造園の学者・技術者といった人々によって造られた「永遠の森」の、意図した通りの風景なのだと思うと、国土の大半を森林が占めると習ってきた山国日本とそこに暮らす日本人の英知に、改めて尊敬の念を抱かずにはられません。全国から多種多様の樹木が集められ植えられたのですが、森林の自然淘汰に任せるため、倒木はそのまま、落ち葉もすべて林内に返すという管理の仕方を守り続けて、今日の森の姿に落ち着いているそうです。

江戸時代には大名の領地であったという神宮敷地の中で、加藤家、井伊家の下屋敷の庭園としての姿を留めているという「御苑」は、明治天皇も度々見に訪れたという花菖蒲がちょうど見頃で、大勢の見物客を迎えてごった返していました。強い初夏の日差しの降り注ぐ南池はスイレンとコイとカメと飛び交うトンボ、その畔も大勢の人で賑わっ



ています。その奥に広がる菖蒲田は紫や白の花盛りを囲む人垣の中にカメラの三脚が並び、ずらりとスケッチブックを並べて写生をしている団体もあつたり。最奥の「清正井（きよまさのいど）」もパワースポットとして行列ができています。

その中を他の見物客とは異なる植物や昆

虫などにも注目しながらの歩みで意外に時間がかかったので、御苑を出ると神宮会館の無料休憩所に直行して昼食をとり、やっと本殿へ。婚礼に華やぐ一角もありましたが、参拝後は、引き続き道草をたくさん食いながら西側の緑地から宝物殿前の広々した芝生広場、北池を経て、北参道入口で明治神宮に別れを告げました。

逗子八郎著『山野逍遥について』に述べるところの、東京都心から「乗車1時間乃至2時間位」どころか30分ほどの場所に「武蔵野の自然の幽趣を探る」贅沢な旅で、「武蔵野の林間を歩み、ふかく自然の声に耳を傾け、そこに伝えらるる歴史と民俗とを探り、清澄な眼と謙虚なる心と、そして滲み出るような真実の勇氣とを養う」という「現世の至幸」を少しは味わえたかなと思います。

予定していたその後の「東京歩き」では、都内の緑地伝いに名所を探訪しながら建設当初の姿に復元された東京駅へ向かうはずでしたが、時間と体力の関係でまたの機会ということになり、東京駅にはJR線で直行しました。そして比較的早い時分に帰宅の途に着きました。（佐々木伸二君の報告文もご覧ください。）

《旅の記録》

行程：東武新鹿沼 7:07——(東武日光線)——北千住——(地下鉄千代田線)——
9:25 明治神宮前……明治神宮(御苑、昼食、参拝、境内散策・自然観察)
……代々木——14:30 東京(駅舎見学)……日本橋——(地下鉄銀座線)
——東武浅草 16:00——(東武日光線・特急使用)——17:22 東武新鹿沼
費用：交通費おとな3,670円、子ども1,840円、
明治神宮御苑入苑料(維持協力金)500円(子どもは200円)

※ 参加者(敬称略)

佐々木伸二、鈴木若菜、平井亜湖・裕子、
小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、
阿部良司・みゆき(計10名)

※ 開花していた植物(草)

チリアヤメ、ネジバナ、オカトラノオ、
ハナショウブ(栽培)、スイレン(栽培)



明治神宮御苑南池畔にて

※ 開花していた植物(樹木)

トウネズミモチ(右写真)、ヤブムラサキ

※ 見た(注目すべき)樹木

イチイガシ、アベマキ、カジノキ、クスノキ、
ウバメガシ、クロガネモチ



※ 見た鳥、聞いた鳥

コゲラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、スズメ、ハシブトガラス

※ 目撃した昆虫

クズノチビタマムシ、コシアキトンボ、サビキコリ、シロテンハナムグリ、
ホシシャク、マイマイガ(幼虫)、マルガタゴモクムシ、ヨツボシケシキスイ



クズノチビタマムシ



ホシシャク



代々木のJ R土手の
ナワシロイチゴ

※ 参加者からいただいたおたより

6月9日(日) 明治神宮の感想

今日は待ちに待った明治神宮での自然観察、および東京遠足です。

5時50分に起き、いそいそと朝ご飯を食べさっさと準備。6時30分に家を出て新鹿沼へ。春日部までは仕事に向かうお母さんと同行。

新鹿沼駅で最初に会ったのは山口さん。その後鈴木さん、平井さん、石崎さんと来て阿部さん。これで全員そろいました。

ホームに入り7時7分に区間会則浅草行きに乗車。新大平下までは各駅停車。新大平下では特急追い抜きを待ちました。その後再び出発。初めののろろ走っていましたが次の静和駅との中間でグンとスピードアップ。さっきまでの遅さはうそみたいです。

そんなことをしていたらもう春日部。ここでお母さんとはお別れです。

その後少し迷いましたが次の北千住で下車。ここで区間快速とはお別れです。のりかえるのは東京メトロ千代田線。コンコースを通りホームへ行くくと多摩急行唐木田行

きが発車していきました。次の普通代々木上原行きで明治神宮前へ。

明治神宮前の駅は出口がたくさんあって少し迷いました。久しぶりに外へ出ると北住に降りた時より明らかに気温が上がっていました。30℃くらいはありそうです。

山手線と埼京線をまたぐ神宮橋を渡り明治神宮へ。さっきの暑さはうそみたいな涼しさです。さすがに森です。

お金を払って庭園へ。さらにうっそうとした森があったり、水辺に花が咲いていたり。清正井(きよまさのいど)を見るために並んだりしました。そんなことをしていたらあっという間にお昼ごはんの時間。お弁当を食べました。その後参道を歩き、明治神宮に参拝。

その後違う出口から出て次に乗る列車の出る代々木駅へひたすら歩きました。右に曲がり野原を抜けて鳥居を抜けて道路へ出ました。山手線に沿って進み駅へ。電柱がほぼ1本残らず落書きをされているのが少し悲しい…。そんなこんなで代々木駅に着きました。ここで中央・総武線の各駅停車に乗りました。目指すは丸の内の名所東京駅です。実はこの各駅停車、御茶ノ水で東京へ行く中央快速線と分かります。代々木を出るとすぐ横を快速線が走って行きました。最初に乗り換えられる四ツ谷で乗り換え。そのまま3駅目の終点東京へ。

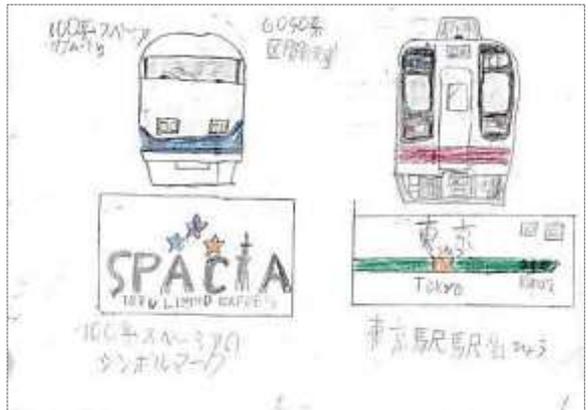
駅舎に入ると高い天井の丸の内北口です。外へ出ると3階建て(一部4階建て)の駅舎が迎えてくれました。駅舎をあちこち歩き、その後自由通路を通り八重洲口へ。ここから徒歩で地下鉄銀座線日本橋駅へ。明治神宮にいた時とは違い阿部さんの足が速い! 植物がないだけ違います。

日本橋駅ではトイレに困りました。階段の横の幅1mほどの通路を5mほど行った先にありました。もっと分かりやすくしてほしいです。何がともあれ無事に銀座線でのりかえ駅浅草へ。ここに着いたのは15時30分くらい。のりかえ予定だった区間快速の出発まで1時間10分もありました。何か他の列車はないかと柱の時刻表を見ていて目にとま

ったのは「特急きぬ125号」

鬼怒川温泉行きという表示。「のりかえなしで早く行ける列車はこれしかない」と思いみんなで相談して特急券を買いに売り場へ走りました。出発まであと15分でした。

全員が特急券を買い終わり列車へ。青色の帯にはさまれるように水色の帯が入っている、



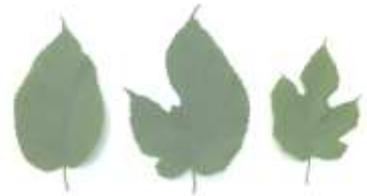
「粋(いき)」というスカイツリーのライティングデザインをもとにして作った列車です。ぼくの座席番号は「3号車1列目301番」です。乗り込むとすぐに発車。すぐ右手にスカイツリーが見えました。隅田川との相性がバッチリです。東京スカイツリー、北千住、春日部、栃木に停車。窓の外の景色は都会から田舎へと変わって行きました。1時間20分で新鹿沼へ到着しました。

様々な列車に乗ったりしてとても楽しい1日でした。 (小5・佐々木伸二・絵も)

山口さんの自然講座

明治神宮の森観察会に参加して

明治神宮は東京都心にある。何もなかった荒地に神宮を建て、そのまわりに樹木を植えて自然を蘇らせた。大きく育ったクスノキ、イヌマキ、アベマキ、コナラ、ウバメガシ、アカガシ、ツクバネガシ、イチイガシなどが圧巻である。関東地方では初めて見るクワ科のカジノキも見られた。カジノキは中国南部や東南アジアの熱帯・亜熱帯原産の樹木で。古い時代に樹皮から紙を作るために入れられた。同じ仲間のヒメコウゾとは、葉が毛深いのが特徴。葉は卵円形で主脈より両側は左右対称だが、両側や片側だけ切れ込む葉もある。葉の成長ホルモンは、葉脈を成長させるオーキシンと葉肉を作るプテリンの2つがある。多くの植物は、この2つの成長ホルモンのバランスが整っているが、プテリンが不足しがちな植物もある。カクレミノのほか、クワ科の植物に多い(右図参照)。明治神宮の森は、樹木の管理を優先された結果、林床に生える草本植物の生育環境がなく、乏しいように思える。もちろん、木の枝が覆い被さり、昼でも暗い所は別である。(山口龍治)



東京駅丸の内北口天井ドーム

(↓明治神宮HP, 他団体の観察記録などによる)

この他、6月の明治神宮で見られる可能性のあるもの一例(順不同)→(植物)ヤブミョウガ、タシロラン、トラノオ、ツククサ、セイヨウアジサイ、ガクアジサイ、アベリア、サンゴジュ、ニワゼキショウ (菌類)アミスギタケ、シロトマヤタケ、クサハツ、アラゲキクラゲ、

※ 明治神宮思い出のアルバム



巨大な木の鳥居



御苑案内図
江戸時代の大名屋敷の庭園の跡

アベマキの幹



イチイガシの幹



御苑の菖蒲田は
花と人で大賑わい



パワースポット、清正井の湧水
しばらく並びました

池にはクサガメやスッポンが→



大きなクスノキの幹



東京駅丸の内中央の
貴賓専用特別乗車口

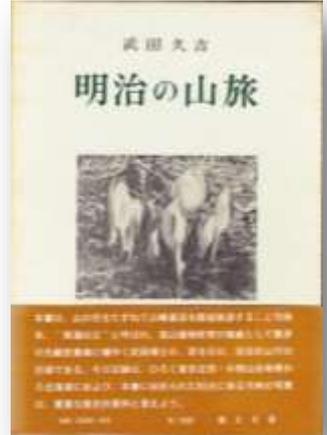
東京駅の新しい姿→



テングタケ、オサムシタケ（冬虫夏草）、粘菌（昆虫など）オトシブミ、ウラギンシジミ、ナナフシ、ナナフシモドキ、サトキマダラヒカゲ、ヒメジャノメ、オニヤンマ、コクワガタ、オオミズアオ、ムネクリイロホタル、ミスイロオナガシジミ、ミスジマイマイ、クロイロコウガイビル（爬虫類）ミシシippアカミミガメ、イシガメ、アオダイショウ（鳥）ツバメ、キビタキ、オオタカ、カワセミ、メジロ、アオサギ（哺乳類）タヌキ

日光・太郎山（標高2357m）ハイキング
～標高2000mに高山植物を求めて～

日光山で執り行なわれるいろいろな行事の1つに強飯式というのがあって、江戸時代には、将軍家が、日光御社参に従って彼の地に行った大名達に、山伏達が、東照大権現から賜わる高盛りの飯やいろいろな野菜などを、むりやりに頂かせるのであるが、数々の珍品の中には、寂光の生大根、霧降の御器の実、中禅寺の木辛皮、蓼ノ海の蓼、滝ノ尾の青山椒、と共に、お花畑の唐辛子というのがある。実際そこに唐辛子があろうとも覚えぬが、このお花畑というのが、太郎山頂の火口陞であることは、昔から言い伝えられている。



この山は、男体、女貌両山の間にある大真子、小真子とは別に、1つ離れて戦場ヶ原の北にそば立っているので、湯元からではわりあいに近いが、日光からでは存外遠いので、一応、男体山の北裏にある志津に行って、そこを根拠地としてから登るより致し方がない。(武田久吉著『明治の山旅』より「太郎山に登る」抜粋)

・昭和46年6月10日・創文社発行)

太郎山は鹿沼の旧市内からは大真名子山に隠れて見えませんが、楡木、西方方面に行くと大真名子山の左斜面の向こうにその姿を現わしてきます。地図を見ると山頂直下の旧火口は湿地のマークになっていて花畑と書いてありますが、貴重な自然遺産として評価される以前から踏み荒らされ、現在では砂漠状態になっています。それでも高山に行くと下界では見られない植物がいろいろ見つかるはずで。標高2,000mまで登っていった春を訪ねて、出掛けてみませんか。

日 時：7月14日（日）AM5：00北小西門集合（雨天中止）

行 程：鹿沼——(日光宇都宮道路)——日光——光徳入口——(志津林道)——登山口

……花畑……太郎山……花畑……登山口——光徳入口——(日光宇都宮道路)
——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着（セーター、ジャンパー）、帽子、軍手、
軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、ポット、レジャーシート、雨具（しっかりした物を）、
お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、お弁当、おやつ

あると便利な物：双眼鏡、図鑑、ルーペ、カメラ、高度計、ストック、
1/25,000 地形図は「男体山」

会 費：おとな 600 円、子ども 300 円（ガソリン代）、
今年度初参加の方は+保険料 800 円。



対 象：小学 4 年生以上で体力に自信のある方。

登行標高差 700m で急斜面ですが際だった悪場はありません。

極力ゆっくり登り、雷雨の可能性があれば、早めに引き返します。

申し込み：7月12日（金）までに、

チャレンジスクール申込書で北光クラブ、または 090-1884-3774 阿部

問合せ：自然観察クラブ 阿部（電話 090-1884-3774）

石崎 電話 090-1464-6899



🌀 来月の予告 🌀

北光クラブ・サマースクール（詳細は別途おしらせします）

8月 4日（日） 昆虫観察（午前6～8時）

8月11日（日） 水の生き物観察（午前8～11時）

🌀 会務報告 🌀

6月14日（水）19時より北小学校集会室にて「平成25年度北光クラブ
総会」が開催され、自然観察クラブからは阿部が出席、平成24年度活動報告
と平成25年度活動予定を説明し、以下のとおり承認されました。

平成24年度活動報告

4月15日（日） 春の自然観察ハイキング

～見野橋より黒川に沿って川化橋へ～

- 5月13日(日) 夕日岳ハイキング
 6月10日(日) 奥日光ハイキング～中宮祠～茶ノ木平～
 8月 5日(日) サマースクール2012・昆虫観察
 7月 8日(日) 水の生き物観察会
 8月19日(日) サマースクール2012・魚釣り教室(鹿沼学舎共催)
 8月 1日(水)より31日(金)まで 黒川水族館
 ～黒川水系に生息する魚類等を一挙公開～
 9月16日(日) 横根山・秋の自然観察ハイキング
 ～牧場、湿原、森林、そしてもうひとつの横根山の魅力～
 10月14日(日) 奥日光、西ノ湖・千ヶ原・高山ハイキング
 ～ミズナラ・ハルニシ等の巨樹を訪ねて～
 11月11日(日) ディーゼル列車に乗って、烏山線沿線、秋の小さな旅
 ～烏山・龍門の滝～太平寺～愛宕台～八雲神社～毘沙門山～烏山城跡～
 12月9日(日) 初冬の日だまりハイキング
 ～益子・三登谷山～雨巻山～足尾山～
 1月13日(日) 日光・外山(とやま)ハイキングと滝尾古道散歩
 ～知られざる名所旧跡を訪ねて～
 2月17日(日) 那須黒羽、社寺参詣と巨樹探訪の旅
 3月31日(日) 武州高尾山ハイキング
 ～早春の草花、暖地性の樹木、薬王院を訪ねて～
平成25年度活動予定(一部実施済み)
 4月16日(日) 春の自然観察会～田んぼの草花、里山の樹木、水生植物～
 5月26日(日) 新緑の古峰ヶ原高原散策～関東ふれあいの道に沿って～
 6月 9日(日) 都会の森の自然観察会
 ～明治神宮に武蔵野の面影を求めて～(東京・明治神宮)
 7月14日(日) 日光・太郎山ハイキング
 8月 4日(日) サマースクール・水の生き物観察会
 8月11日(日) サマースクール・雑木林の昆虫観察
 9月 那須・茶臼岳(ロープウェイ利用)
 10月 日光・戦場ヶ原(湯本—湯滝—泉門池—赤沼)
 11月 茂木・仏頂山(笠間・楞厳寺～仏頂山)(益子からSLに乗って)
 12月 田沼・大鳥屋山
 1月 真岡・井頭公園(野鳥観察)と益子、西明寺・地藏院
 2月 栃木・太平山より佐野・岩船山へ
 3月 つくば・筑波山



田部文学は「さりげなさの文学」である。

自然に呼ばれ、自然と筆が融合する。

そうしようと思って勿論出来ることではない。

ヒトの鎧を脱ぎ捨て、まさに“巡禮びと”となって逍遙することで愁思の様々な魂の傷の瘡が生されていったのであろう。

今日、田部は一般にはほとんど識られていない。

形だけ識られるよりはいい。なぜなら田部重治は識ろうと頭を働かす中には存せず、知音に佇む人だからである。山に悟りを開き、“漱石枕流”の現し身は目立たぬ、はしゃがぬ、田部ならではの師への手向けの崇高な到達点といえる。

『鹿沼の自然・栃木の旅』第13号は5月発行にふさわしく、萌え出づる田部愛の心に満ち満ちている。田部重治への一里塚をここにまたひとつほのぼのと見出せたことを喜ぶ。

(白坂正治・田部重治研究会)



※ 本誌第13号(5月号)に特集した「田部重治」について研究されている方から連絡をいただき、数部をお送りしたところ、おたよりと、掲載文の過誤の指摘をいただきました。謹んで掲載させていただくとともに、正誤表を付させていただきました。

月報第13号掲載の「田部重治」関連記事中、次のとおり訂正をお願いします。

- 4 ページ第3段落4行目
(誤) 安部能成、市川三喜 → (正) 安倍能成、市河三喜
- 5 ページ6行目
(誤) 1912年(大正元年) → (正) 1912年(明治45年)
- 5 ページ第2段落1行目
(誤) 講演「登山はいかに余に…」 → (正) 講演「山はいかに余に…」
- 10 ページ書影の本は、(誤) (昭和19年8月25日・六合書院発行)
→ (正) (昭和16年5月30日・第一書房発行) です。

以上、白坂氏からご指摘いただきました。ありがとうございました。(編集部)

☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	野中 至編『富士案内』より・・・・・・・・・・・・・・・・	2
活動報告	都会の森の自然観察会～明治神宮に武蔵野の面影を求めて～・・・・・・・・	6
次回案内	日光・太郎山（標高 2357m）ハイキング ～標高 2000mに高山植物を求めて～・・・・・・・・	12
来月の予告	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
会務報告	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
読者からいただいたおたより	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15

会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。
また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭にあります。（無料）
確実な入手をご希望の方は、年会費（1,200円）をお納めいただければ、
ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第15号

2013年7月1日発行
北光・自然観察クラブ
鹿沼市戸張町1818
（クリーニングハウスあべ内）
発行人 阿部 良司
年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

